

タイトル 『ロミオ的な人とジュリエット』

原作 ウィリアム・シェイクスピア

作 黒川 陽子

登場人物 男八人 女三人

ロミオ

ジュリエット

ジュリエットの乳母

キャピュレット

キャピュレット夫人

マキューシオ

ベンヴォーリオ

ティボルト

パリス伯爵

ロレンス神父

ヴェロナ太守

キャピュレット家の屋敷。

宴の後。

バルコニーにジュリエットがいる。

ジュリエット ああ、ロミオ、ロミオ、あなたは どうしてロミオなの？ あなたのお父様をお父様でないといい、その名前をお捨てになって。あるいは、ただ一言、私を愛すると誓って。そうすれば私は たった今から、キャピュレットでは ありませんわ。私たちを隔てるものは、私たちの名前だけ。名前が いったいなんだろう。手でもなければ 足でもない。腕でもなければ 顔でもない。人の身体の どんな部分でも それはない。私たちが バラと呼んでいるあの花の、名前が なんと変わるうと、香りに 違いはないはずよ。ロミオ だって 同じこと。名前は ロミオで なくっても、あの神より 愛おしいお姿は、名前とは 別に、そのまま 残るに 決まっていますもの。ああ、ロミオ、その名前をお捨て になって。そして、あなたの 血肉でも なくても、その名前のかわりに、この私の すべてをお取 りに になって いただきたいの！

暗闇から声がする。

声 お言葉どおり頂戴しましょう！ ただ一言、僕を恋人と呼んでください。そうすれば新しく洗礼を受けたも同様、今日からは、たえてロミオではなくなります。

ジュリエット 誰ですか？ 夜の闇に隠れて人の秘密を立ち聞くなんて。

声 なんと名乗っていいものか。それというのも、あなたの仇の名前だからです。ああ、尊いあなた、僕の名前が腹立たしい。紙にでも書いてあるのなら、そのまま破ってしまいたいくらい。

ジュリエット そのお言葉の響き……私の耳はそのお言葉を百とは味わっていませんが。

ロミオ様、モンタギュー家の、ロミオ様じゃございません？

声 いいえ、あなたが嫌うなら、そのどちらでもありません！

声の主が現われる。

その姿は乳母。

ジュリエット ばあや！

乳母 お言葉どおり捨ててまいりました。僕はもう、ロミオではありません。さあ、この胸に飛び込んでいらっしやい、ジュリエット。僕たちには邪魔する名前などないのです。

ジュリエット そんなところで何しているの、ばあや。

乳母 ばあや……「ばあや」というのが僕の新しい名ですね。「恋人」には劣るが悪くない。

いいでしょう、僕は今日から「ばあや」になります。そして、いつまでもあなたのお側にいます。

ジュリエット 何を言っているかわからないわ。それよりばあや、いま私がどんな気持ちかわかって？ 失望したわ。私がひとり言を言っていると知って、黙って立ち聞きしたのね。

乳母 立ち聞きはしましたが、喜びで声も出なかったのです。あなたのお言葉の数々、僕にとつては輝く宝石のようでした。

ジュリエット からかわないで。

乳母 からかってなど…… ああ、尊いあなた、先ほどのお言葉、すべて本心と思ってもよろしいのですか？

短い間。

ジュリエット そういえば、お母様が探していたわよ。あなた、今日のパーティーでひどく酔っ払っていたそうじゃないの。しかも、片付けもしないで抜け出して。後で怒られ

ても知らないわよ。

乳母 パーティーの片付け……？ たしかに僕は、片付けをしないで帰ろうとしました。

それが客の礼儀だと思ったものだから。

ジュリエット 客？ いったい誰のことよ。

乳母 僕です。

ジュリエット あなたがお客なわけがないじゃないの。

乳母 そうですね、たしかに。僕は招かれざる客で、実のところ、あなたのお屋敷にも仲間と忍び込んだのです。

ジュリエット ねえ、ばあや、その妙な喋り方をやめて。変な気分になってくるわ。

乳母 ごめんなさい。これからはきつと、片付けをしてから出かけます。あなたの「ばあや」となった今、それが当然のことですから。

ジュリエット ……そうね、そうして頂戴。

乳母 その、春の日差しのような光の溢れる部屋が、あなたの寝室ですか？

ジュリエット そうだけど、何を今更。

乳母 すぐに伺います。できればこの木を登って飛び移りたいが、この身体ではそうもいかない。ほんの短い間だけれど、さようなら。あなたは僕の道しるべの星。どうか僕が到着するまで、消えずに輝いていてください。

乳母、走り去る。

ジュリエット 変な夜。一晩で二十も年をとったような気分だわ。さあ、どうしよう。あのお喋りなばあやに何もかも聞かれてしまった。いまに屋敷じゅうが大騒ぎになるわ。

……そうだ、また歌の文句だと言ってごまかそう。私のたった一つの恋の蕾。大切に育てないと。

ジュリエット、部屋に入る。

ベンヴォーリオの声 ロミオ！ おーい、ロミオ！

ベンヴォーリオとマキューシオが現われ、そこは路上に変わる。

マキューシオ 利口者だからな、あいつは。今頃はもう、家に帰って寝ている。

ベンヴォーリオ いや、こっちへ駆けてきたはずだ。マキューシオ、君も呼んでみてくれ。

マキューシオ 仕方ねえなあ。そんならひとつ、奴をおびき出してやろう。(女のような声を作り) ああ、ロミオ様、ロミオ様、いったいどこにいらっしやいますの？

ベンヴォーリオ なんだい、それは。

マキューシオ あたしよ、ロザラインよ。いつもは冷たくしてごめんね。でもこの通り、心を入れ替えてまいりました。どうか出てきてくださらない？ あたし、淋しくって、淋しくって。

ベンヴォーリオ あいつが聞いたらカンカンになるぜ。

マキューシオ あたし、あなたがお持ちの洋ナシが欲しいの（卑猥なニュアンスを込めて）細長くって、根元のたっぷりしたやつが。

どこからか、陽気な笑い声が聞こえる。

ベンヴォーリオ 行こう。こっちにはいないようだ。

マキューシオ ああ、ロミオ様！ ベンヴォーリオが、あたしを連れていこうとするわ。きつと、あたしをたぶらかそうって腹よ。あたし、初めての相手はロミオ様しかいないって決めているのに！

ふたたび、笑い声が聞こえる。

ベンヴォーリオ （小声で）誰かいる。キャピュレットの奴らだったらマズいぞ。

マキューシオ 大丈夫だ。あの声には聞き覚えがあるからな。ロミオ、ロミオいるんだろ？

木の上にロミオが現れる。

ロミオ ロミオ様じゃありませんがね、あなた様のモノマネが、あまりに可笑しかったものですから。

ベンヴォーリオ ロミオ、卑怯だぞ。そんなところに隠れていたのか。

マキューシオ 俺らはてつきり、お前においてきぼりを食らわされたかと思っただぜ。

ロミオ、地面に飛び降りる。

ロミオ ロザライン様はどちらにいらっしやいます？

ベンヴォーリオ さあ。まだキャピュレットの屋敷にいるのかしらんが。

ロミオ 行って、モノマネを披露してやりましょう。

マキューシオ ロミオ、お前酔っ払ってるな。あのモノマネを披露した日にや、お前の失恋は決まったも同然だ。

ロミオ 大丈夫ですよ、ロミオ様なら新しいお相手ができたんですから。

ベンヴォーリオ おっ、ということは、俺の薬が効いたんじゃないか？ 言っただろ、ヴ

エロナじゅうの美人という美人の集まった中じゃあ、ロザラインなど、まるでカラスの

ようなものだってな。

ロミオ ロザリン様は綺麗な方です。でもロミオ様のお相手ときたら、ヴェロナじゅうの美人という美人をカラスの群れにしてしまう。まるで白鳩のようなお方なのです。

マキューシオ ほお、それは結構なこった。

ロミオ そのお嬢様にお乳を差し上げましたのが、誰あろう、この私というわけでして。マキューシオ おい、これは妙なことを言うぞ。お乳だと？

ベンヴォーリオ さては薬が効きすぎたのかもしれないな。新しく出来た恋人の視線にめくらめつぼうに刺しぬかれ、こいつはいよいよ、腑抜けのようになってしまったのだ。

マキューシオ あるいは逆かもしれないぞ。ロミオ、お前がお乳をやったからには、そのお嬢様はさぞかし、賢い方なんだろうな。

ロミオ もちろんでございますよ。そう、あれはお嬢様が乳離れをなさる、前の日のことでしたっけ。その頃お嬢様はチョコチョコ、駆け歩きなどもなさいましたが、転んでオデコに怪我をなさったんですよ。それで、うちの主人が——神よ安らかに眠らせてまえ——主人もあれで、なかなか面白い人でございましたが、お嬢様を抱き上げて差し上げますとね、言うことがいいじゃありませんの。「おやおや、うつぶせにお転びですかい？もう少しお利口におなりになったら、仰向けにお転びなさいませよ」って。そしたらあなた、それまで火がついたように泣いていたお嬢様が、ピタッとお泣きやみになって「うん、うん」と仰ったんです。「うん、うん」と仰ったんでございますよ。「仰向けにお転びなさいませよ」って、そう主人が申し上げますとね、ピタッとお泣きやみになって「うん、うん」って。(けたたましく笑う)でもそうそう、そのオデコにね、可愛いヒヨコのお金玉ほどのコブなどおこさえになりました。あれはあれで、危ないことでございますたっけ。

間。

ベンヴォーリオ おい、これはいよいよだぞ。お前、大丈夫か？

マキューシオ 見事だ！ それでこそ我らがロミオ。

ベンヴォーリオ え？

マキューシオ ずいぶんと回復しやがったじゃねえか。ここんところのお前ときたら、ロザリンを想ってクヨクヨ、メソメソ。ロミオであってロミオにあらず、ニシンの干物よりさらに悪いって有様だったからな。それでこそロミオの面目躍如、どっから見ても、正真正銘ロミオ様、っていうもんだ。

ベンヴォーリオ そうかい？ 俺にはロミオがこんな奴だったように思えないんだが。

マキューシオ そういうことなら話は早い。ロミオ、恋をモノにするいちばんの秘訣は、押し押して押しまくることだ。誰だか知らんがそのお嬢様……

ロミオ ジュリエット様。

マキューシオ ジュリエット様のお宅を突きとめてだな、
ベンヴォーリオ ジュリエット様?!

マキューシオ なんだ急に。

ベンヴォーリオ ジュリエット様というのは、あのジュリエット様か?!

マキューシオ 待て待て。そして、家の者の目を盗んでだな、お嬢様の部屋に忍び込むのよ。例えばそう、裏の窓に縄梯子でも引っかけてだな……

ロミオ (かぶせて) 裏の窓?!

マキューシオ なんだ。どうした。

ロミオ お嬢様の部屋には裏の窓などございませぬよ。バルコニーならございませぬがね。

マキューシオ じゃあ、そのバルコニーに縄梯子を引っかけてだな……

ベンヴォーリオ (かぶせて) バルコニー?!

マキューシオ なんだよ。

ベンヴォーリオ ロミオ、どうしてお嬢様の部屋にバルコニーがあると知っているんだ。

つまりお前は、ジュリエット様の部屋の近くまで行ったってことか?

ロミオ 行ったもなにも、年がら年中寝起きさせていたでいますよ。

ベンヴォーリオ 年がら年中寝起きしている?!

マキューシオ だから、その状況を打破するためにだな、俺が手ほどきしてやってるんだ。

それだな、うまいこと部屋にお嬢様がいたら、上からおつかぶさって一突きにしてやるのよ。で、むこうがうっかり色っぽい声でも出そうもんなら……

ベンヴォーリオ (マキューシオを制して) シツ、黙れ。

マキューシオ 馬鹿な。物語の佳境だぞ。

ベンヴォーリオ でも、あそこにテイボルトがいるんだ。

三人、ベンヴォーリオの指す方角を見る。

マキューシオ あの蚊トンボ野郎、屋敷の外で何してやがる。

ベンヴォーリオ ロミオを探しているのだろうな。

ロミオ ロミオ様を。

ベンヴォーリオ あいつ、今日のパーティーでこいつ(ロミオ)のことをすごい目で見ていた。モンタギュー家の奴が来ている、晴れの席を冒瀆する悪党が来るとまで言うたんだぞ。

マキューシオ なに、こいつ(ロミオ)にか?

ベンヴォーリオ いや、あの家の主人にだ。すごい剣幕で、主人でさえ宥めるのがやっとなんて有様だった。

マキューシオ くそ、あの心底腐りきった酔コンブ野郎が……!(テイボルトに近づこうとする)

ベンヴォーリオ やめろ。あっちも手出しをしなかったんだ。こっちも今日のところは大人しくするのが礼儀だろう。さ、帰ろう。せっかくの宴の余韻を、自らぶち壊しにすることはあるまい。

ロミオ それでは、私はここで。

マキューシオ ロミオ？

ロミオ お話してきて楽しゅうございました。また当方でパーティーの際は、是非ともお越しく下さいませ。

ベンヴォーリオ ロミオ、それは駄目だ。お前の思い人はキャピュレット家にいるのかしらんが、今日のところは諦めて帰ろう。また喧嘩になるのがオチだからな。

マキューシオ 待てよ。ジュリエット様というのは、あのジュリエット様か？！

ベンヴォーリオ いま気付いたのか。

マキューシオ それは無理だ。ジュリエットはキャピュレット家の一人娘だろう。ロミオとでは水と油。一緒になるなんて絶対に無理だ。

ロミオ 一つお伺いしてもよろしいでしょうか。

マキューシオ なんだ。

ロミオ 先ほどから、あなた方は私をロミオとお呼びになる。どうしてでしょうか。

ベンヴォーリオ どうしてとは……どうしてだ？

マキューシオ なんだなんだ、その天地を引っくり返すような謎掛けは。どうしてお前をロミオと呼ぶのか？ それはお前がロミオだからだ。

ロミオ たしかに私は今、若い男の姿をしています。手も、足も、顔も。私の記憶が正しければ、今日のパーティーにいらしていた、モンタギュー家のロミオ様に似ているかもしれない。でも、あなた方にもそう見えるのですか？

ベンヴォーリオ ……幽霊話か。大いに結構。道々ゆつくり聞こう。さあ。

ロミオ、留まる。

マキューシオ ロミオ、安心しな。お前は頭のとっぺんから足の先まで一部の隙も無くロミオだ。試しにキャピュレットの屋敷に乗り込んでみるがいいや。むこうの奴らが寄つてたかって、お前を立派な犬のエサにでも仕立て上げてくれるはずだから。

ベンヴォーリオ さ、行こう。三人寄り合えば、無謀な恋にも良い知恵が浮かぶかもしれない。

三人、連れ立って去る。

ロミオが戻ってくる。

ベンヴォーリオの声 ロミオ！

ロミオ、走り去る。

ベンヴォーリオとマキューシオ、戻ってくる。

マキューシオ お前の言う通りかもしれないな。あいつは無謀な恋を繰り返すあまり、ついにおかしくなってしまったんだ。

マキューシオ、ベンヴォーリオ、去る。

続く